



オツベルと象

学びナビ

語り手

作者と語り手

『桜蝶』では、「視点」について学びました。ここでは、「語り手」について理解しましょう。

物語や小説を書いたのは作者です。では、次の文の作者は誰でしょう。

吾輩は猫である。名前はまだない。

これは、小説『吾輩は猫である』の冒頭です。「猫」の視点から語られています。作者は「猫」ではありません。作者は夏目漱石です。物語や小説を読むとき、作者とは別に語り手を想定する必要があります。作者と語り手を区別することが、文学作品を読むうえで重要です。語り手は、登場人物の外から語ったり、内面に入り込んで自由に語り手を行います。『吾輩は猫である』の場合、語り手は「猫」の視点から語っています。このような場合、「猫」を視点人物といます。語り手が登場人物やできごとをどう語るのかに着目することで、読みを深めることができます。

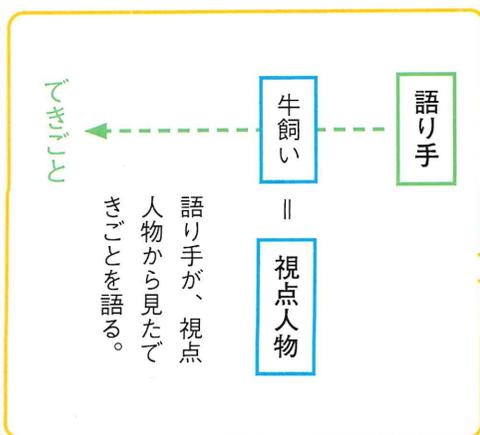
目標

- 語句の意味や擬声語・擬態語に注意し、その工夫や効果を理解する。
- 場面と場面、場面と描写などを結びつけて内容を解釈する。

- 視点／桜蝶
- 語り手
- 入れ子構造（額縁構造）／少年の日の思い出

物語・小説

作者



語り手と視点人物

それでは『オツベルと象』について考えてみましょう。

『吾輩は猫である』の「猫」と同じように、『オツベルと象』では「牛飼い」の視点から登場人物やできごとが語られています。ですから、語り手は「牛飼い」を視点人物として語っているといえるでしょう。

ただし、作品の冒頭に「……ある牛飼いが物語る。」とあることに注意してください。「猫」とは異なり、語り手は、「牛飼い」がこういう話を語ったというかたちをとりつつ、実は「牛飼い」の話を語り直しているのです。

そこで、語り手が「牛飼い」を通して、「オツベル」や「白象」をどう語るか、「オツベル」の繁栄はんえいと没落ぼつらくというできごとをどう見ているかを読み取ることが大事です。次の各場面の冒頭部分に注意して、「牛飼い」の「オツベル」に対する見方の変化と「白象」の行動との関わりを読み取りましょう。

- ・「オツベルときたらたいしたもんだ。」（第一日曜）
- ・「オツベルときたらたいしたもんだ。」（第二日曜）
- ・「オツベルかね、そのオツベルは、俺おれも言おうとしてたんだが、いなくなつたよ。」（第五日曜）

語り手

物語・小説内で、お話（できごと）を語るもの。

視点人物

語り手ができごとを登場人物の視点から語る場合、その登場人物を視点人物という。



ヒント

●「第一日曜」「第二日曜」のオツベルと白象の会話部分から、どのような人物像が浮かんでくるかに注意して読んでみよう。

●場面の内容と擬声語・擬態語の使われ方に注意しながら読んでみよう。



オツベルと象

みやざわ
けんじ
宮沢 賢治

……ある牛飼いが物語る。

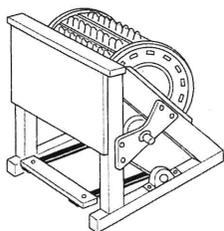
第一日曜

オツベルときたらたいしたもんだ。稲いねこき機械の六台も据すえつけて、のんのんののんのんと、おおそろしない音をたててやっている。

十六人の百姓ひやくしやうどもが、顔をまるつきり真まつ赤あかにして足で踏ふんで機械を回し、小山のように積たまれた稲をかたっぱしからこいていく。わらはどんだん後ろの方へ投げられて、また新しい山になる。そこらは、もみやわらから立たった細かなちりで、

5

稲こき機械



▼ 稲
▼ 据

おおそろしない
ひどく大きな。

▼ 姓

意
物語る

変にぼうつと黄色になり、まるで砂漠の煙けむりのようだ。

その薄うす暗い仕事場を、オツベルは、大きな琥珀こほくのパイプをくわえ、吹き殻がらをわらに落とさないよう、目を細くして気をつけながら、両手を背中に組み合わせて、ぶらぶら行ったり来たりする。

小屋はずいぶん頑丈がんじょうで、学校ぐらゐもあるのだが、なにせ新式稲こき機械が、六台もそろって回ってるから、のんのんのんふるうのだ。中に入るとそのために、すっかり腹がすくほどだ。そして実際オツベルは、そいつで上手に腹を減らし、昼飯時には、六寸ぐらいのビフテキだの、雑巾ぞうきんほどあ

15

10

5



▼ 漠

▼ 煙

▼ 薄

▼ 琥珀

大昔に樹脂じゆしが地中に埋まって化石になったもの。透明または半透明の黄色をしていて、装飾品そうじやくに用いられる。

▼ 吹き殻

▼ 吹
吸い殻。

▼ 丈

▼ 六寸

一寸は、約三センチメートル。

▼ 巾

文 まるで……ようだ

意 なにせ

対 新式

るオムレツの、ほくほくしたのを食べるのだ。

とにかく、そうして、のんのんのんやっていた。

そしたらそこへどういうわけか、その、白象がやってきた。白い象だぜ、ペンキを塗ったのでないぜ。どういうわけであつたか？ そいつは象のことだから、たぶんぶらっと森を出て、ただなにとなく来たのだろう。

そいつが小屋の入り口に、ゆっくり顔を出した時、百姓どもはぎよつとした。なぜぎよつとした？ よくきくねえ、何をしだすか知れないじゃないか。かかり合つては大変だから、どいつも皆、一生懸命、自分の稲をこいでいた。

ところがその時オツベルは、並んだ機械の後ろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらつと鋭く象を見た。それからすばやく下を向き、なんでもないとふうで、今までどおり行ったり来たりしていたもんだ。

すると今度は白象が、片足床に上げたのだ。百姓どもはぎよつとした。それでも仕事が忙しいし、かかり合つてはひどいから、そつちを見ずに、やっぱり稲をこいでいた。

オツベルは奥の薄暗い所で両手をポケットから出して、も一度ちらつと象を見た。それからいかにも退屈そうに、わざと大きなあくびをして、両手を頭の後ろに組ん

15

10

5

▼
皆

▼
床
▼
忙
▼
奥
▼
屈

▼
文
とにか
▼
文
ところが
▼
意
いかにも

で、行ったり来たりやっていた。ところが象が威勢いせいよく、前足二つ突き出して、小屋に上がってこようとする。百姓どもはぎくつとし、オツベルも少しぎよつとして、大きな琥珀のパイプから、ふつと煙を吐はき出した。それでもやっぱり知らないふうで、ゆっくりそこらを歩いていった。

そしたらとうとう、象がこのこ上がってきた。そして機械の前のところを、のんきに歩き始めたのだ。

ところがなにせ、機械はひどく回っていて、もみは夕立かあられのように、パチパチ象に当たるのだ。象はいかにもうるさいらしく、小さなその目を細めていたが、またよく見ると、確かに少し笑っていた。

オツベルはやつと覚悟を決めて、稲こき機械の前に出て、象に話をしようとしたが、その時象が、とてもきれいな、うぐいすみたいないい声で、こんな文句を言ったのだ。

「ああ、だめだ。あんまりせわしく、砂が私の歯に当たる。」

全くもみは、パチパチパチパチ歯に当たり、また真つ白な頭や首にぶつつかる。

さあ、オツベルは命がけた。パイプを右手に持ち直し、度胸をすえてこう言った。

「どうだい、ここはおもしろいかい。」

▼威

■類
のんき

「おもしろいねえ。」象が体を斜ななめにし、目を細くして返事した。

「ずうつとこつちにいたらどうだい。」

百姓どもははつとして、息を殺して象を見た。オツベルは言ってしまったから、にわかにながたがた震ふるえだす。ところが象はけろりとして、

「いてもいいよ。」と答えたもんだ。

「そうか。それではそうしよう。そういうことにしようじゃないか。」オツベルが顔をくしゃくしゃにして、真っ赤になって喜びながらそう言った。

どうだ、そうしてこの象は、もうオツベルの財産だ。いまに見たまえ、オツベルは、あの白象を、働かせるか、サーカス団に売り飛ばすか、どっちにしても万円以上もうけるぜ。

第二日曜

オツベルときたらたいしたもんだ。それにこの前稲こき小屋で、うまく自分のものにした、象も実際たいしたもんだ。力も二十馬力もある。だいいち見かけが真っ白で、牙きはは全体きれいな象牙ぞうげでできている。皮も全体、立派でしょうぶな象皮なのだ。

15

10

5

▼斜

▼牙

類
意
見
か
け
に
わ
か
に

そしてずいぶん働くもんだ。けれどもそんなに稼ぐのも、やっぱり主人が偉いのだ。

「おい、おまえは時計はいらないか。」丸太で建てたその象小屋の前に来て、オツベルは琥珀のパイプをくわえ、顔をしかめてこうきいた。

「僕は時計はいらないよ。」象が笑って返事した。

「まあ持つてみる、いいもんだ。」こう言いながらオツベルは、ブリキでこきえた大きな時計を、象の首からぶら下げた。

「なかなかいいね。」象も言う。

「鎖もなくちゃだめだろう。」オツベルときたら、百キロもある鎖をき、その前足にくつつけた。

「うん、なかなか鎖はいいね。」三足歩いて象が言う。

「靴を履いたらどうだろう。」

「僕は靴など履かないよ。」

「まあ履いてみる、いいもんだ。」オツベルは顔をしかめながら、赤い張り子の大きな靴を、象の後ろのかかとはめた。

「なかなかいいね。」象も言う。

「靴に飾りをつけなくちゃ。」オツベルはもう大急ぎで、四百キロある分銅を、靴

15

10

5

意
鎖

▼ ▼
履 靴

▼
鎖

▼ ▼
偉 稼

の上から、はめ込んだ。

「うん、なかなかいいね。」象は二足歩いてみて、さもうれしそうにそう言った。

次の日、ブリキの大きな時計と、やくざな紙の靴とは破け、象は鎖と分銅だけで、大喜びで歩いておった。

「すまないが税金も高いから、今日はすこし、川から水をくんでくれ。」オツベルは両手を後ろで組んで、顔をしかめて象に言う。

「ああ、僕水をくんでこよう。もう何杯でもくんでやるよ。」

象は目を細くして喜んで、その昼過ぎに五十だけ、川から水をくんできた。そして菜っ葉の畑にかけた。

夕方象は小屋にいて、十把のわらを食べながら、西の三日の月を見て、

「ああ、稼ぐのは愉快だねえ、さっぱりするねえ。」と言っていた。

「すまないが税金がまた上がる。今日はすこし、森から薪を運んでくれ。」オツベルは房のついた赤い帽子をかぶり、両手をかくしに突っ込んで、次の日象にそう言った。

「ああ、僕薪を持ってこよう。いい天気だねえ。僕はぜんたい森へ行くのは大好きなんだ。」象は笑ってこよう言った。

▼ 込

やくざな
役にも立たない。

▼ 杯

▼ 把

三日の月
旧暦の三日の月。三

▼ 愉

▼ 薪

かくし
ポケット。

▼ 文
さも

オツベルは少しぎよっとして、パイプを手から危なく落としそうにしたが、もうその時は、象がいかにも愉快なふうで、ゆっくり歩きだしたので、また安心してパイプをくわえ、小さなせきを一つして、百姓どもの仕事のほうを見に行った。

その昼過ぎの半日に、象は九百把薪を運び、目を細くして喜んだ。

晩方象は小屋にいて、八把のわらを食べながら、西の四日の月を見て、

「ああ、せいせいした。サンタマリア。」と、こころ独り言したそうだ。

その次の日だ。

「すまないが、税金が五倍になった。今日はすこし鍛冶場かじばへ行って、炭火を吹いてくれないか。」

「ああ、吹いてやろう。本気でやったら、僕、もう、息で、石も投げ飛ばせるよ。」

オツベルはまたどきとしたが、気を落ち着けて笑っていた。

象はその鍛冶場へ行って、べたと足を折って座りすわ、ふいごの代わりに半日炭を吹いたのだ。

その晩、象は象小屋で、七把のわらを食べながら、空の五日の月を見て、

「ああ、疲れたな、うれしいな、サンタマリア。」と、こころ言った。

どうだ、そうして次の日から、象は朝から稼ぐのだ。わらも昨日はただ五把だ。

15

10

5

サンタマリア
聖母マリア。キリスト
の母。

ふいご
金属せいれんの精錬に用いる送
風機。

よくまあ、五把のわらなどで、あんな力が出るもんだ。

実際、象は経済だよ。それというのもオツベルが、頭がよくて偉いためた。オツベルときたらたいしたもんさ。

第五日曜

オツベルかね、そのオツベルは、俺も言おうとしてたんだが、いなくなったよ。

まあ落ち着いて聞きたまえ。前に話したあの象を、オツベルは少しひどくしすぎた。仕方がだんだんひどくなったから、象がなかなか笑わなくなった。ときには赤い竜の目をして、じつとこんなにオツベルを見下ろすようになってきた。

ある晩、象は象小屋で、三把のわらを食べながら、十日の月を仰ぎ見て、

「苦しいです。サンタマリア。」と言ったということだ。

こいつを聞いたオツベルは、ことごと象につらくした。

ある晩、象は象小屋で、ふらふら倒れて地べたに座り、わらも食べずに、十一日の月を見て、

「もう、さようなら、サンタマリア。」と、こう言った。

15

10

5

▼
仰

「おや、なんだって？ さよならだ？」月がにわか象にきく。

「ええ、さよならです。サンタマリア。」

「なんだい、なりばかり大きくて、からつきし意気地いけぢのないやつだなあ。仲間へ手紙を書いたらいいや。」月が笑ってこう言った。

「お筆も紙ありませんよう。」象は細ういきれいな声で、しくしくしく泣きだした。

「そら、これでしよう。」すぐ目の前で、かわいい子どもこどもの声こゑがした。象が頭を上げて見ると、赤い着物の童子どうしが立って、すずりと紙をささげていた。象は早速さつそく手紙を書いた。

「僕はすいぶんめに遭あっている。みんな出てきて助けてくれ。」

童子はすぐに手紙を持って、林の方へ歩いていった。

赤衣しやくえの童子が、そうして山に着いたのは、ちょうど昼飯頃ひるめしだった。この時、山の象ぞうどもは、沙羅樹さらかじゆの下の暗くらがりかりで、碁ごなどをやっていたのだが、額ぬかを集めてこれを見た。

「僕はすいぶんめに遭っている。みんな出てきて助けてくれ。」

象は一斉いっせいに立ち上がり、真まっ黒くろになってほえだした。

15

10

5

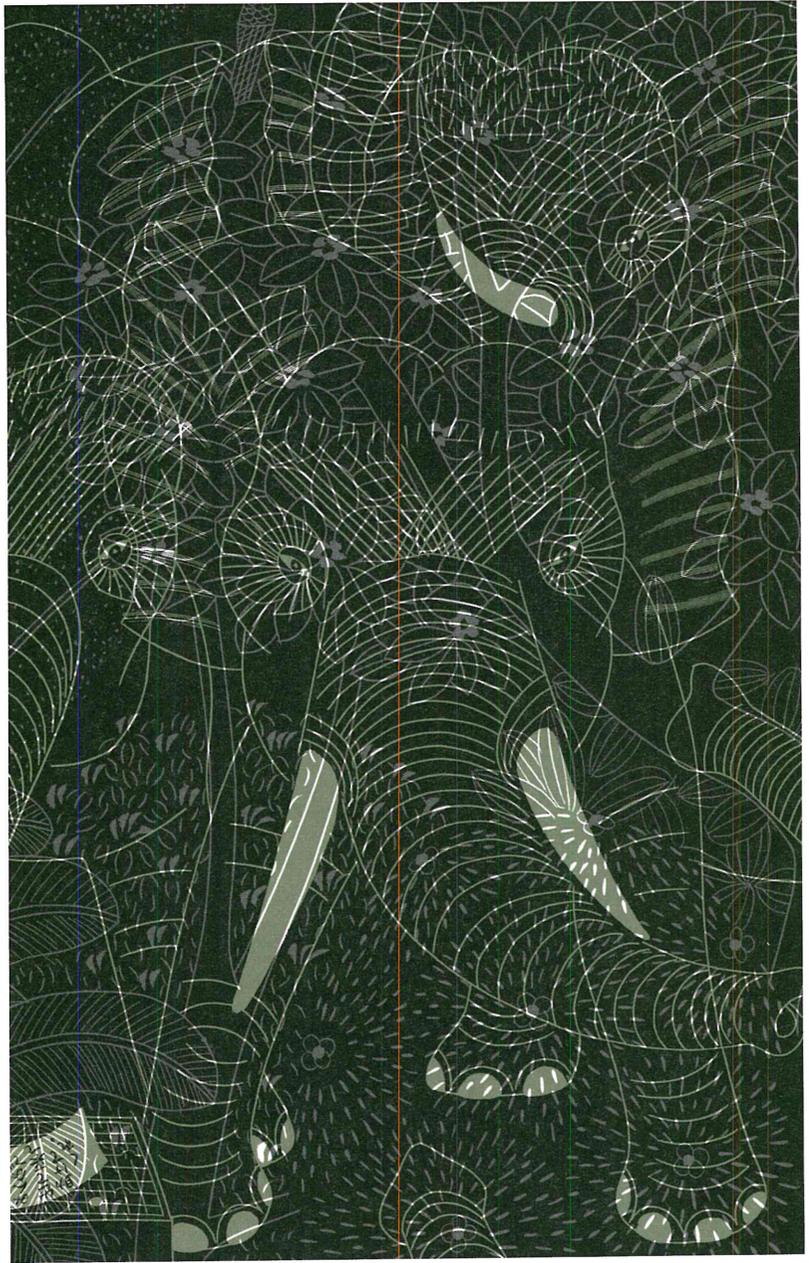
赤あかい着物きものの童子どうし
 仏教ぶつこうの経典きんてんに出てくる菩薩ぼさつの従者じゆしやのこと。
 めに遭あっている
 ひどいめに遭あっている。

沙羅樹さらかじゆ

沙羅双樹さらかじゆともいう。インド原産の常緑高木。高さは三十メートルにも達し、薄黄色の花を開く。

▼碁ご

意い暗くらがり



「オツベルをやつつけよう。」議長の象が高く叫ぶと、

「おう、出かけよう。グララアガア、グララアガア。」みんなが一度に呼応する。

さあ、もうみんな、嵐あらしのように林の中を鳴き抜けて、グララアガア、グララアガア、グララアガア、野原の方へとんでいく。小さな木などは根こぎになり、やぶやなんかもめちやめちやだ。グワア グワア グワア グワア、花火みたいに野原の中へとび出した。それから、なんの、走って、走って、とうとう向こうの青くかすんだ野原の果てに、

5

▼嵐

■ 意呼応

オツベルの屋敷の黄色な屋根を見つけると、象は一度に噴火した。

グララアガア、グララアガア。その時はちょうど一時半、オツベルは皮の寝台の上で昼寝の盛りで、からすの夢を見ていたもんだ。あまり大きな音なので、オツベルの家の百姓どもが、門から少し外へ出て、小手をかざして向こうを見た。林のような象だろう。汽車より速くやってくる。さあ、まるつきり、血の気もうせて駆け込んで、「だんなあ、象です。押し寄せやした。だんなあ、象です。」と、声を限りに叫んだもんだ。

ところがオツベルはやっぱり偉い。目をぱちちりとあいた時は、もうなにもかもわかっていた。

「おい、象のやつは小屋にいるのか。いる？ いる？ いるのか。よし、戸を閉める。戸を閉めるんだよ。早く象小屋の戸を閉めるんだ。ようし、早く丸太を持ってこい。閉じこめちまえ、ちくしょうめじたばたしやがるな、丸太をそこへ縛りつけろ。何ができるもんか。わざと力を減らしてあるんだ。ようし、もう五、六本、持ってこい。さあ、だいじょうぶだ。だいじょうぶだとも。慌てるなったら。おい、みんな、今度は門だ。門を閉める。かんぬきをかえ。突っ張り。突っ張り。そうだ。おい、みんな心配するなったら。しっかりしろよ。」オツベルはもう支度ができて、

▼ 噴

▼ 縛

▼ 文
声を限りに

ラッパみたいないい声で、百姓どもを励ほげました。ところがどうして、百姓どもは気が気じゃない。こんな主人に巻き添ぞえなんぞ食いたくないから、みんなタオルやハンケチや、汚よごれたような白いようなものを、ぐるぐる腕うでに巻きつける。降参をする印なのだ。

オツベルはいよいよ躍やつき起おきとなつて、そこら辺りを駆け回る。オツベルの犬も気がたつて、火のつくようにはえながら、屋敷の中をはせ回る。

まもなく地面はぐらぐらと揺ゆられ、そこらはばしゃばしゃ暗くなり、象は屋敷を取り巻いた。グララアガア、グララアガア、その恐ろしい騒さわぎの中から、

「今助けるから安心しろよ。」優やさしい声も聞こえてくる。

「ありがとう。よく来てくれて、ほんとに僕はうれしいよ。」象小屋からも声がする。さあ、そうすると、周りの象は、いっそうひどく、グララアガア、グララアガア、塀へいの周りをぐるぐる走っているらしく、たびたび中から、怒おこって振り回す鼻も見える。けれども塀はセメントで、中には鉄も入っているから、なかなか象も壊せない。塀の中にはオツベルが、たった一人で叫んでいる。百姓どもは目もくらみ、そこらをうろろするだけだ。そのうち外の象どもは、仲間の体を台にして、いよいよ塀を越こしかかる。だんだん、にゆうと顔を出す。そのしわくちやで灰色の、大

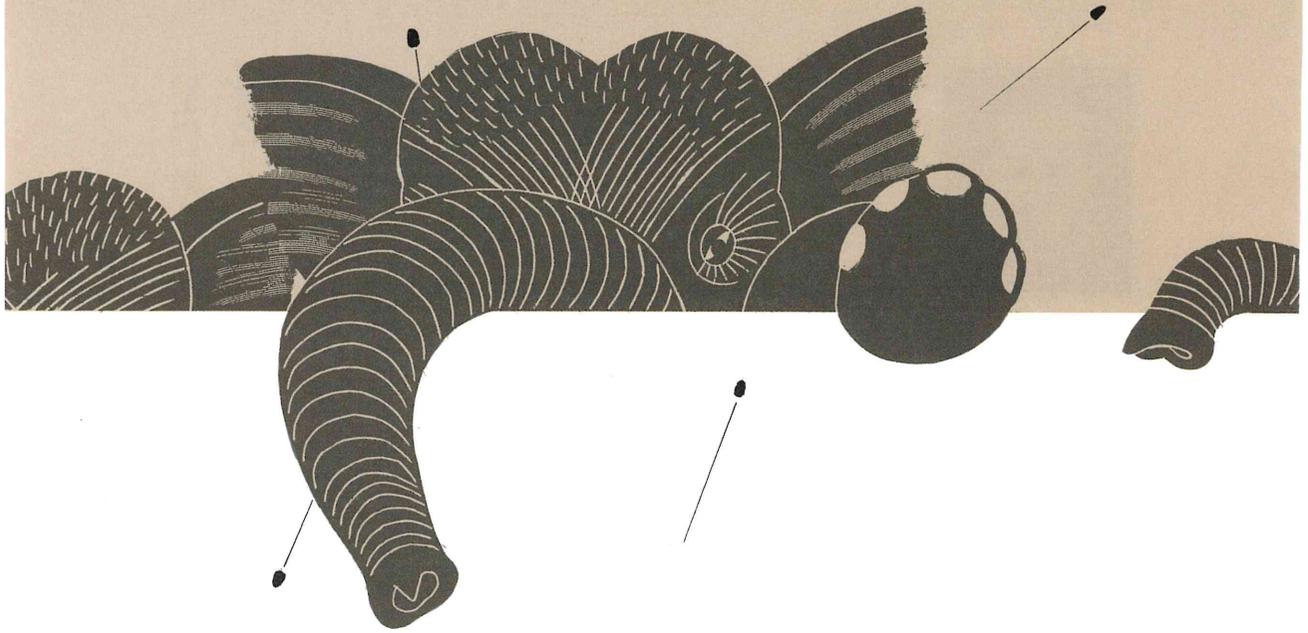
▼ 励

▼ 添

▼ 躍

▼ 騒

類 降参
意 躍起
文 まもなく



きな顔を見上げた時、オツベルの犬は気絶した。さあ、オツベルは撃ちだした。

六連発のピストルさ。ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア。ところが弾は通らない。

牙に当たれば跳ね返る。一匹なぞはこう言った。

「なかなかこいつはうるさいねえ。パチパチ顔へ当たるんだ。」オツベルはいつかどこかで、こんな文句を聞いたようだと思いつつ、ケースを帯から詰め替えた。そのうち、象の片足が、塀からこつちへはみ出した。それからも一つはみ出した。五匹の象がいつぺんに、塀からどつと落ちてきた。オツベルはケースを握ったまま、もうくしゃくしゃに潰れて

▼替

文 意 意
どつと 跳ね返る
いつぺんに

いた。早くも門が開いていて、グララアガア、グララアガア、象がどしどしなだれ込む。

「牢^{ろう}はどこだ。」みんなは小屋に押し寄せる。丸太なんぞは、マッチのようにへし折られ、あの白象は大変^や痩せて小屋を出た。

「まあ、よかったね、痩せたねえ。」みんなは静かにそばに寄り、鎖と分銅をはずしてやった。

「ああ、ありがとう。ほんとに僕は助かったよ。」白象^{さび}は寂しく笑ってそう言った。おや、川へはいっちゃいけないいたら。



宮沢 賢治（一八九六—一九三三）

岩手県に生まれた。詩人・作家。

詩集に『春と修羅』、童話に『注文の多い料理店』『銀河鉄道の夜』などがある。

《出典》『新校本 宮沢賢治全集 第十二巻』によった。

▼瘦

千 みちしるべ

内容を捉えよう

- 学ビ** ① 作者、② 語り手、③ 牛飼い、④ ほかの登場人物の関係を整理しよう。

読み深めよう

- 2** 『オツベルと象』を音読し、擬声語・擬態語の使われ方の特徴とその効果について考えよう。
- 3** 「オツベル」と「白象」はどのような人物だと考えられるか、まとめよう。
- 4** 「第一日曜」「第二日曜」のできごとと、「第五日曜」のできごとの、同じところや異なるところを比べよう。

自分の考えを伝え合おう

- 学ビ** **5** 「ああ、ありがとう。ほんとに僕は助かったよ。」(P 168 L 7)と、白象が「寂しく笑って」言ったのはなぜか、意見を交流しよう。
- 6** 「オツベル」についての語り方が、「第一日曜」「第二日曜」と「第五日曜」で変化しているのはなぜか、考えよう。

参考

「第一日曜」「第二日曜」では、「オツベルときたらたいたしたもんだ。」(P 154 L 5・P 158 L 14)、「頭がよくて偉いためた。」(P 162 L 2)などとオツベルを評価しているが、「第五日曜」では、「オツベルかね、……いなくなったよ。」(P 162 L 7)と、語り方が変化している。

言葉・情報

● 言葉と表現

この作品には、段落の最初に「とにかく」(P 156 L 2)、「そしたら」(P 156 L 3)、「ところが」(P 157 L 7)などの言葉が多く出てくる。これらはどのようなはたらきをしているか、確かめよう。

振り返り

- 「オツベル」や「白象」の行動や心情を、語句の意味や擬声語・擬態語に注意して読み取っているか。
- 「牛飼い」が語っていることに着目し、場面と描写を結びつけながら解釈しているか。
- 『オツベルと象』を音読することで感じられた描写のおもしろさを、擬声語・擬態語という言葉を用いて説明しよう。



この教材で学ぶ漢字

156 床 ゆか とこ シヨウ 床の間 床下	156 皆 みな カイ 皆勤 皆さん	155 巾 キン 布巾	155 丈 たけ ジヨウ 丈夫 背丈	155 吹 ふく スイ 吹奏楽 吹き消す	155 薄 うすい ハク 薄情 薄明かり	155 煙 けむる エン 禁煙 雨に煙る町 煙が上がる	155 漠 バク 漠然	154 姓 セイ シヨウ 姓名 百姓	154 据 すゐる 据えつける	154 稻 いな トウ 水稻 稲刈り 稲作
159 履 はく 履歴 上履き	159 靴 くつ 靴下	159 鎖 くさり サ 鎖国 鉄の鎖	159 偉 えらい イ 偉人 偉ぶる	159 稼 かせぐ 稼ぎ	158 牙 きば ク 象牙 牙をむく	158 斜 ななめ シャ 斜線 右斜め上	157 威 イ 威力	156 屈 くつ 不屈	156 奥 おく 奥歯	156 忙 いそがしい ボウ 多忙 忙しい 忙しさ
166 励 はげむ レイ 激励 励ます	165 縛 しばる バク 束縛 縛り上げる	165 噴 ふく フン 噴火 噴き出す	164 嵐 あらし 砂嵐	163 碁 あおぐ 碁石	162 仰 あおぐ ギョウ 信仰 仰角 天を仰ぐ	160 薪 たきぎ シン 薪炭 薪拾い	160 愉 ユ 愉快	160 把 ハ 把握	160 杯 さかずき ハイ 一杯 金の杯	160 込 こむ 申し込む

新出音訓

161 座★ (すわる)

163 早速★ (サツ)

165 盛り★ (さかめる・セイ)

165 支度★ (タク・たび)

166 優しい★ (やさしい・すぐれる)

「付表」の語

161 鍛冶 (かじ)

163 意気地 (いくじ)

●小学六年生の漢字

155 砂○ 漠

155 六○ 寸

156 並○ ぶ

157 度○ 胸

158 立○ 派

161 危○ ない

161 晚○ 方

162 経○ 済

163 沙○ 羅樹

165 閉○ める

166 降○ 参

166 灰○ 色

166 躍 おどる ヤク 活躍 躍り上がる	166 添 そえる テン 添加物 添え物
167 替 かえる タイ 交替 両替	166 騷 さわぐ ソウ 騒音 騒ぎ
	168 瘦 やせる 瘦せた犬